座位保持装置の家庭での利用状況

茨城県立医療大学保健医療学部理学療法学科
宮崎　泰

はじめに

このシリーズでは、姿勢と呼吸機能、摂食・嚥下機能、筋緊張、水泳・チェアスキー・乗馬等の各種のスポーツとの関連が述べられています。今回は、座位保持装置の工夫・改良に加え座位保持装置に自助具をとりつけ、子どもの発達に積極的に働きかけている事例を紹介します。

子どもと座位保持装置の紹介

Mくん、15歳。養護学校高等部1年生です。低酸素性脳症による四肢・体幹機能障害があります。両下肢を引きつけるような緊張と反り返るような緊張があり、右凸の重度側彎を合併しています。ADLはほぼ全介助です。

小学部に入学してからこれまで4台の座位保持装置を使っています。現在は、2台の座位保持装置を使用しています。1台は木製椅子で、家庭内や外来訓練の時に使っています。他の1台は移動介助の比較的容易なパンサーで、養護学校で使っています。

今回紹介する木製椅子は、使い始めて6年目になり、これまで身体の成長や使い方の変化に応じて幾度か修理をしています。

以下に、Mくんの座位保持装置の工夫･改良点をあげます。

1. 休息的な座位と上肢を使う時などの活動的な座位の双方を考慮し、背もたれをリクライニング式にし、座面の傾斜角を調整可能にした。
2. 右凸側彎に対応するために取り外し可能なパッドによって背もたれに凹凸をつけ、身体の接地面を広くし体圧を分散させた。
3. 通気性を良くするために、背もたれをウレタンフオームの表面にへちま状のシート材を重ねたものにし、背もたれに篭った熱を外部に逃がすように工夫した。このことによって背中の汗ばみが少なくなったそうです。
4. 反り返るような緊張や身体の僅かな動き等による姿勢の崩れを防止するために、座面のカバーをビニールレザーからゴム製のコーティング生地に変えた。お尻がずれて姿勢が崩れることは防止できたものの、移乗介助がやり難くなったそうです。
5. 手の動きを引き出すための工夫･改良
   右側の肘置きにエルゴレスト（手の動きを補助するための自助具）を取り付け、肩や肘の僅かな力で物に手を伸ばすことが出来るように工夫した。エルゴレストを取り付けている肘置きは座面から独立しているために、背もたれや座面の傾斜に影響を受けることなくエルゴレストを利用することができます。

写真1は、エルゴレストを利用し、コミュニケーションスイッチを押している場面です。ホームヘルパー、訪問ナース、ボランティアの学生との交流だけでなく手を動かすことに気づき、自らの力でスイッチに到達できるようになるための学習の場にもなっています。

写真 2 は座面を後方に倒した姿勢で、ＯＴ（作業療法士）の援助によってボーリングに挑戦しているところです。自分の手や赤いボールをチラリと見ることがあります。緊張が強い場合にはエルゴレストから腕が外れてしまうので、だて締めを使って腕を固定します。上体を起こし過ぎると、座位を保持することで精一杯になり上肢を動かすことが出来なくなります。

写真 3 はカットアウトテーブルを使っている場面です。座面の角度を変えても肘置きの角度を水平位に保持できるように改良してあります。この頃は、カットアウトテーブルを固定するために肘置きを利用していましたので、カットアウトテーブルを使いながらエルゴレストを利用することは出来ませんでした。

写真 4 はカットアウトテーブルの代わりに原稿台を使用して絵本読みをし、上肢の機能を引き出している場面です。現在は、肘置きから独立したエルゴレスト専用の支持柱を取り付け、エルゴレストを利用しながらカットアウトテーブルの上で学習や遊びをすることが出来るようになっています。

以上、Ｍくんのご家族の説明を引用しながら、工夫・改良の一部を紹介してきました。障害の重度な子どもたちの両親の、「先ずは、何とか座位を保持させたい」というニーズを背景に、座位保持装置は急速に広まってきています。また、座位保持装置の普及に伴って、良肢位の保持と呼吸機能、摂食・嚥下機能、筋緊張との関連についての報告もされています。そして、現在では、家庭用、学校用、外出用など用途に応じた座位保持装置が使われるようになってきています。しかしながら、これまでの座位保持装置に関する調査結果及び新たな調査の分析から、座位保持装置を利用して上肢機能に積極的に働きかけるような取り組みは少ないことが推察されました。

Ｍくんの座位保持装置の場合、「ここはおかしい」「こうあってほしい」といった家族の「気づき」に対して、セラピストや製作業者が応え、十分な検討を重ねる中で工夫・改良が進められています。そして、Ｍくんにも「座位姿勢が良くなった」「物をよく見るようになった」「僅かながらも物で遊べるようになった」等の変化が現れています。これらの変化が座位保持装置によるものかどうかを判断することはできませんが、座位保持装置が日々の生活を豊かにする福祉用具としてなくてはならないものになっているとのことでした。

今後、座位保持装置を休息的な姿勢保持具から活動的な姿勢保持具として発展させていくためにも、使用者の「声」に積極的に応えていくことが必要だといえます。

最後に、セラピストや製作業者の細やかな配慮がＭくんの座位保持装置に形となって実現していることに対するご家族の感謝の気持ちを記して結びと致します。

参考文献

1) 宮崎 泰、大竹 朗、松村伸次、柳迫康夫：在宅重症心身障害児の座位保持装置に関する親の満足度. 日本重症心身障害学会誌. 26:27−33. 2001.